

羆 嵐

著者 吉村 昭 (1927年(昭和2年)5月1日 - 2006年(平成18年)7月31日)
東京・日暮里生まれ。学習院大学中退。1966年『星への旅』で太宰治賞を受賞。同年発表の『戦艦武蔵』で記録文学に新境地を拓き、同作品や『関東大震災』などにより、1973年菊池寛賞を受賞。現場、証言、史料を周到に取材し、緻密に構成した多彩な記録文学、歴史文学の長編作品を次々に発表。日本芸術院会員。小説家津村節子の夫。
磯田光一は「彼ほど史実にこだわる作家は今後現れないだろう」と言っている。
フィクションを書くことを極力避けた小説家である。

羆嵐の元となった事件

『三毛別羆事件 (さんけべつひぐまじけん)』

1915年(大正4年)12月9日～12月14日にかけて、北海道苫前郡苫前村(現:苫前町古丹別)三毛別(現:三溪)六線沢で発生した、クマの獣害としては記録的な被害を出した事件。六線沢熊害事件、苫前羆事件とも呼ばれる。羆が数度にわたり民家を襲い、開拓民7名が死亡、3名が重傷を負った。事件を受けて討伐隊が組織され、問題の熊が射殺されたことで事件は終息した。

ガウガウ

【三毛別羆事件跡地】

この場所では、最も被害が大きかった明景家で羆の襲撃状況が再現されています。周りの散策路では、熊穴や爪痕などの再現。

体重380キロ
体長2メートル70センチ
立ち上がると3m50cm

このヒグマは、推定7、8歳のオス。体長2.7m、体重340kgもあり、前脚の手のひらが幅20cm、後脚のそれは30cmもあった。(日本の家屋の天井が、だいたい2.1m)
運動能力も驚くべきもので、巨体にも関わらず、時速50km/hで走ることができ、泳ぎも得意。前後の脚には鋭利で長い5本の鉤爪をもち、牛や馬を殴り倒すほどの腕力。また大きな犬歯は、捕食した動物の骨や木の根を噛み砕くほどの咀嚼力、咬力を持つ。聴覚や嗅覚にも優れ、人には分からないほど遠方の獲物や敵の気配を察知する。

「あまりの巨体のため、自分の身に合う越冬穴を見つけられなかったのではないかと推測(問題のヒグマを待ち伏せたマタギ)
→作中には「穴持たずの羆は気性が荒い」とある。

黒褐色一色ながら胸のあたりに「袈裟懸け」と呼ばれる白斑があった。

冬眠を逸した一頭のヒグマが空腹から凶暴性を発揮したのではないかと推測

【参考資料】

「羆嵐」の登場人物

羆(ひぐま) … 左記参照の食欲旺盛すぎる怖い羆
銀四郎 … 老練な羆打ち専門の打ち猟師。酒に呑まれ、暴れすさんだ生活をしている
区 長 … 銀四郎に頼る。 銀オヤジ×区長

被害者(死亡7名・重傷者3名)
島川家 … 島川妻と息子
明景家 … 明景家三男(3歳)、斎田妻(34歳)と胎児、その次男(3歳)

「ユリ熊嵐」 (アニメ)

あるとき、宇宙に浮かぶ小惑星「クマリア」が爆発し、その破片が隕石となって地球に降り注いだ。するとこれに呼応するように地球上の全てのクマが突然凶暴化し人間を襲うようになる。かくして人間とクマの長い戦いが始まり、いつしかお互いへの憎しみから両者を隔てる「断絶の壁」が築かれた。
そんなある日。人間側にある「嵐が丘学園」に百合城銀子と百合ヶ咲るるという2人の転校生がやってきた。だがこの2人、その正体は「断絶の壁」を越え、人間に化けた「人食クマ」だったのだ。